

講演者等プロフィール

山添 康

内閣府食品安全委員会 シニアフェロー

山添シニアフェローは、2012年7月より、内閣府 食品安全委員会 委員長代理を務め、現在は、食品安全委員会 シニアフェローとして助言を行っている。

1973年、藤沢薬品工業（株）研究所に入社。慶應義塾大学医学部（1977）に研究助手として勤務。米国食品医薬品局（FDA）/ 国立毒性研究センター（NCTR）の客員研究員として渡米。のち、慶應義塾大学へ戻り、1986年、助教授、1990年に東北大学薬学部教授に就任。

山添シニアフェローは、化学物質や生物学的な側面から化学物質の薬物代謝・発癌性に関する研究成果として国際的に評価されている。主な研究関心は、代謝活性化、保護、薬物相互作用、発癌性および毒性を含む「化学的媒介生物活性における代謝的役割」にある。化学、酵素、薬理学的研究に基づいた薬物代謝に関するピアレビューされた310以上の論文を発表。研究は、分子発癌性や毒物学的事象、特に環境発癌物質にも及ぶ。また、101レビューペーパーと本の章の著者でもある。さらに、毎年国際的に招かれた講義や数多くの国内講演を行う。

山添シニアフェローは、大阪大学で、生薬化学の学士（1971）及び修士（1973）を取得、また、同大学で、薬学のPh.D.（1981）を取得した。

Georges Eugene Nicolas Kass（ジョージ・カス）

欧州食品安全機関 リスク評価及び科学的支援局 主任技官

カス博士は、1984年に英国サリー大学を卒業後、1990年にスウェーデンのカロリンスカ研究所で毒性学の博士号を取得。1994年よりサリー大学健康医科学部で毒性学の教授を務めた後、2009年から欧州食品安全機関（EFSA）のリスク評価及び科学的支援局の主任技官及びユニット長補佐を務めている。また、英国ニューカッスル大学細胞医学研究所の名誉会員、英国サリー大学健康医科学部毒性学の客員教授を併任している。

現在「Toxicology and Applied Pharmacology」誌の編集委員を務めており、これまでに50回を超える学術講演、基調講演、招待講演を行っている。

分子毒性学の専門家として、薬剤による細胞死誘導などの分子機序に関心を持ち、特に、薬剤による細胞シグナル伝達経路の攪乱及びガンなどの重大なヒト疾患に関連する細胞生存過程への影響に焦点を当ててきた。また、リスク評価者として、新規アプローチの開発と、化学物質のリスク評価実施における新技術の影響に関心を持つ。

小野 敦

岡山大学 薬学部／大学院医歯薬学総合研究科（薬学系）教授

小野教授は、2016年より、岡山大学 医歯薬学総合研究科の教授である。専門分野は毒性学一般であり、これまでにトキシコゲノミクス研究や内分泌かく乱化学物質スクリーニング法開発などに携わってきた。現在は、研究課題である応用研究（化学物質のヒト健康リスク評価における（定量的）構造活性相関およびカテゴリーアプローチの実用化に関する研究、AOPおよびIATAに立脚した国際的な安全性評価手法の確立、気道障害性を指標とする室内環境化学物質のリスク評価手法の開発に関する研究等）に従事。現在は、化学物質の健康リスク評価における構造活性相関の適用に関する国内共同研究も行っている。

小野教授は、北海道大学 薬学部を卒業し（1991年）、同大学 薬学研究科修士課程を修了（1993年）。2000年に、昭和大学 薬学部（毒物学分野）にて薬学 博士号を取得。

前職は、国立医薬品食品衛生研究所 室長であった（1993年4月から2016年7月まで）。

山田 隆志

国立医薬品食品衛生研究所 安全性予測評価部 室長

山田室長は、2015年より、国立医薬品食品衛生研究所 安全性予測評価部 第四室 室長を務めている。

山田室長は、1993年に神戸大学農学部を卒業し、1995年に同大学院農学研究科修士課程を修了。1998年に同大学院自然科学研究科博士後期課程を修了し、博士号（農学）を取得。カリフォルニア大学デービス校博士研究員、福山大学生命工学部講師を経て、2007年より（独）製品評価技術基盤機構化学物質管理センター研究専門官、その後2015年に国立医薬品食品衛生研究所に異動し、現在に至っている。

主に、インシリコ評価技術を用いた毒性予測・評価手法の開発に関する研究、並びにこれらに必要な研究に従事し、定量的構造活性相関手法やカテゴリーアプローチを用いた毒性評価手法の確立、毒性評価に関する各種データベースの開発に関する研究を行っている。

OECDのIATAケーススタディプロジェクト、QSAR Toolboxマネージメントグループ、分子スクリーニング・トキシコゲノミクス会合の各専門委員、米国のThe Interagency Coordinating Committee on the Validation of Alternative Methods (ICCVAM) Read-across Working Group専門委員、食品安全委員会 評価技術企画ワーキンググループの専門委員も務める。

Weida Tong (ウェイダ・トン)

米国食品医薬品局 国立毒性研究センター 生物情報学・生物統計学部部門長

トン博士は、1983年に中国上海復旦国立大学を卒業し、1989年に同大学で高分子化学の博士号を取得。1991年からミズーリ大学セントルイス校で計算化学者として勤務の後、1996年より米国食品医薬品局（FDA）/ 国立毒性研究センター（NCTR）に勤務。現在、同研究センターの生物情報科学・生物統計学部部門長を務めている。また、アーカンソー州立大学リトルロック校の情報科学の教授、ラトガース大学の薬理学の准教授、アーカンソー医科大学の薬科学の准教授を併任している。

Global Coalition for Regulatory Science Research（GCRSR）の理事会や欧州委員会のEUToxRisk21の科学諮問委員会などに参加している。また、ネイチャー出版グループ「Scientific Data」誌の編集顧問委員を務めている。

生物情報学・化学情報学・計算機科学の方法をバイオマーカーの発見、薬剤の安全性と適用追加、ゲノム薬理学やトキシコゲノミクス、精密医療などへ適用することを目指している。

Daniel Doerge (ダニエル・ドーギー)

米国食品医薬品局 国立毒性研究センター 上席生物医学研究員

ドーギー博士は、1973年にオレゴン州立大学を卒業後、1980年にカリフォルニア大学デービス校で農業・環境科学の博士号を取得。カリフォルニア大学デービス校、マイアミ大学、フロリダ大学で助手や研究助手、ハワイ大学環境生化学部で准教授を歴任された後、1992年より米国食品医薬品局（FDA）/ 国立毒性研究センター（NCTR）に勤務。また、1992年からアーカンソー医科大学で薬理学と学際的毒性学の非常勤准教授を務めている。

現在、世界保健機関（WHO）の食品安全に関する専門助言パネルメンバーであると共に、欧州食品安全機関（EFSA）、FDAなどの専門委員として化学物質のリスク評価に関わっている。これまでに75回を超える招待講演を行い、2008年、2014年には食品安全委員会においても講演されている。

化学物質の毒性における化学的・生化学的機構及び化学物質のリスク評価を専門分野として、大量解析型の新規質量分析法による薬物動態やDNA付加体の同定、ビスフェノールA・アクリルアミド・大豆イソフラボンなどの毒性、甲状腺毒性の機序解明などに関心を持っている。